

「教育の扉」より ①

初等教育資料 平成24年10月号 (NO. 891)

あきらめない気持ちを支える要素

厚生労働省 社会・援護局長 村木 厚子

学校、仕事、様々な出会い

(中略)

～就職するとき、女性は厳しい状況だったとうかがいました～

最初は「女だから」と言われたくないという思いがあったのですが、だんだん「自然体でいいじゃないの」という感じになってきたような気がします。

これは、女性に限らないのですが、家庭責任を負ったときにそれをどうこなしていくかというところが、一番つらいところでしょうね。子育て中の後輩には、どうしても職場に迷惑をかけることもあるけれど、子どもに対しても職場に対しても、申し訳ない、あるいはこういうことでのいのだろうかと思悩むのはやめたほうがいいと言っています。

私は今、家庭責任のある女性を部下として使う立場になりましたが、いくら部下が申しわけないと思っても、申しわけないと思うこと自体は職場にとっては何の役にも立ちません。むしろパフォーマンスを下げることのほうが多いので、家庭責任が重くてどうしてもそれ以上ががんばれないところはできないと割り切れと言っています。そのかわり、職場との貸し借りの感覚だけはもってくれと。今、自分は借りをつくっている。どこかで今度は逆に、誰かが大変なときにはそれをカバーしてあげるというような、貸し借りの感覚だけはもっていてくれと。

あきらめない気持ちを支える要素

～お仕事をされていく中で大きな 事件に巻き込まれましたね～

私自身にとっても、すごくびっくりするような出来事でした。まったく身に覚えのないことで逮捕や勾留をされるのは、本当に予想だにできなかったもので、非常に戸惑いました。

(中略)

自分がかんばれたのは、一つは先ほど申し上げたように家族とまわりの友人や仲間のサポートですが、もう一つ大きかったのが弁護士さんというプロの力です。6人の弁護士で構成されましたが、弁護士資格を持っていても得意不得意がそれぞれ違ってチームプレーでした。

私か担当している子どもや障害の分野にも共通するのですが、結局一人の人間が抱えている問題を解決しようと思うと、それぞれの分野のプロが連携しないとなかなか解決できない。

子どもたちが抱えている問題は家族から派生している問題もあるし、医療が必要だったり、福祉が必要なこともある。子ども同士の関係でもやはり根が深い。先生方はそれを全部一人で引き受けると、きつとパンクしてしまうので、そこをできるだけチームサポートするようにネットワークを張っていくと、楽になるのではないのでしょうか。

学校は、子どもの問題を一番発見しやすいところだと思いますが、それを解決するときはいろいろな人の力がいると思います。今の学校の先生はすごく大変だと思いますが、いろいろなところとつながって、うまく子どもたちの問題を解決するメインプレイヤーになってくれたらいいなと思っています。

「教育の扉」より ②

～特に小学校教育で大事にすると よい点はありますか～

信頼できる大人がいると思えることが大事だと思います。先生はそういう存在でいてくれたらいいですね。もちろんまずは親がそういう存在にならなければいけないのですが、おそらく親の次にめぐり会う大人が先生ですから。特に小学校一年生のときの担任はすごく強烈な印象です。やはり信頼できる大人がいる、あるいは自分のことを考えてくれる大人がいることを子どもが実感することが第一歩ではないでしょうか。

そこからあとは「大人は嫌いだ」という出来事がたくさん起こったとしても、信頼できる大人が一人でもいる、信頼できるもの、自分がこうありたいと思うものをきちんともてると、割と揺れないというか、がんばれるというか、揺れても重心が真ん中にすぐ戻ってくると思います。

～先生方にアドバイスをいただけますか～

やはりまずは、食べて寝てください。そうでないと、心が弱ってしまうから。あとは、いろいろなことで迷ったときに、原点に返ることだと思います。先生方だと、それは子どもだということになるのでしょうか。たとえば、校長先生にはこう言われた、保護者にはこう言われた、教育委員会はああ言っている、マスコミの論調はこうだ…。私も仕事で必ずそういう場面が出てきます。上司はこう言っている、与党はこう言っている、野党はこう言っている、団体はこう主張している…。それで引き裂かれそうになるときがあります。

一体どうするのか、足して二で割るのかと悩んでいるとき、本当に悩んで方向を見失いそうなときに、ふと、この政策は何のためにやっていたのかと、当たり前のことですが行政対象のところに返っていく。結局誰のための政策かというところに帰っていくと、選択肢を選ぶときの物差しが自分のなかにきちんと戻ってくる。

振り回されているときは正しい物差しを見失いがちです。原点に戻ると答えが見付かる、あるいは自分の選んだ答えに対して自信がもてるようになると思います。

経験は役に立つ

～子どもたちにメッセージをお願いします～

今回の件で私が学んだのは、苦勞したことや大変だったことは、あとで必ず役に立つということです。これはきっと、子どもたちにとっても先生方にとってもそうだと思います。

私か最近お目にかかった中で非常に印象的だったのが、天台宗の大阿闍梨の酒井雄哉先生です。雑誌の対談だったのですが、編集者が酒井先生に「村木さんは何でこんな目にあっただけでしょうか」と聞いたら、酒井先生が「村木さんは仏様に論文を書かされたんだよ」と言われました。

酒井先生は人は皆それぞれ仏様から課題を与えられて人生の論文を書くと言われました。私はその話がすごくしっくりきました。ああ、私はああいう課題をもらって論文を書いたのかと。

人間は、皆それぞれに、神様か仏様から課題を与えられ、論文を書く。○×ではなく、選択式でもなく、記述式なので、全員答えが違う。いろいろな課題がそれぞれに降ってきて、それに皆自分なりの答えを書いている。誰も同じ答えはなくて、自分のオリジナルの答えを書いていくのだと受け止めたら、すごくしっくりきました。

いろいろな災難が振ってきたら、今は宿題が下りてきて、自分でこれに答案を書かされているんだと。その答えが皆それぞれのオリジナルで、そうやって人生が積み重なっていく、そんなふうに考えると人生はおもしろいと思います。だから、「自分の答えを書く」ということを大切に。そして答えに悩んだら誰かに助けを求めてみることです。話すだけで楽になることもあるし、話しているうちに自分で答えを見付けられることもあるし、何より、自分と違う人に話せば、自分と違う知恵が出てきます。それも含めて自分の論文を完成させてはどうでしょうか。